

上野村からの手紙

内山 節

うちやま・たかし 1950年東京生まれ。哲学者。立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科・特任教授。NPO法人・森づくりフォーラム代表理事など。1970年代初頭から、東京と群馬県の山村・上野村との二重生活をしている。著書に「労働過程論ノート」、「山里の釣りから」、「自然と労働」、「森にかよう道」、「哲学の冒険」、「里の在処」、「森の列島に暮らす」など多数。

自然と人間の共生という言葉から、今日の私たちはどんな内容を連想するだろうか。たとえばそれは地球温暖化の防止であり、そのために企業、個人、国家がどんな改良を積み重ねるかだったりする。自然保護が開発がよく議論された時期もある。壊れた自然を復元していく自然再生も課題になるだろう。農業、林業、漁業などが持続できる社会をつくっていくことも大切だ。さらには経済のあり方や一人ひとりの暮らし方の見直し。そんなことが次々に頭に浮かぶだろう。

ところが今日の私たちのジレンマは、次のようなところにある。それはいま述べたような課題はどれも重要なものであるにもかかわらず、それらを並べた先に、問題の解決がみいだせないことにある。そしてその原因は、矛盾の合理的な解決をめざそうとすると、全体としての合理性と、個々の企業や個人にとつての合理性が一致しなくなってしまうところにある。

たとえばエネルギー効率を高め二酸化炭素の排出量を削減するには、自家用車や自動車による輸送をやめ、鉄道輸送に切り換えるほうが全体としては合理的である。しかしそれが個人や企業にとつて合理的な判断だとは限らない。さらに鉄道企業にとつても、地球温暖化防止のためとはいえ、赤字路線まで建設、維持することは合理的とはいえないだろう。

膨大なエネルギーを消費しながら都市を再開発し、その結果現在の東京のように、再開発ビルが東京の風の流れまで止めて夏の暑さまでを増大させて森に山神を祀り、川の無事を祈って水神を祀る。この自然の無事は、村の無事、自分の暮らしの無事と強く結びついている。それらを切り離すことはできない。なぜなら人間たちの営みを支えてくれる自然が無事であつてこそ、村も、個々の人々の日々も無事だからである。少なくともそう感じさせる文化がこの村にはある。

春になると山菜がでてくる。経済的な面から考察するなら、この山菜はたいしたものではない。ほとんど販売されることはないし、家庭の食卓のごく一部を飾るだけだ。ところが村にいと、山菜がでてきたときに感じる豊かさは大きなものがある。自然とともに冬を過ごし、いま春を迎えた。農業の季節が訪れ、それは私にとつては釣りの季節でもある。自然とともにこの村は春を迎えたのだ。もうじき春祭り。そんなことを感じとつていく共有された文化のなかで、山菜が食卓にのぼる。

ここにある価値は、合理的な価値ではない。それは村人が共有している文化的な価値であり、村の歴史が育んできた歴史的価値である。自然の無事に支えられて、村や村人の無事もあるというこの村の確信も同じようなものだろう。それを合理的に説明することはできない。山菜がなくても村は困らないことを合理的に説明しようとすればいくらでもできる。山の木はいまではほとんど経済的価値はないのだから、森は村の暮らしを支えてはいないと合理的に説明することはできるだろう。だが村の文化はそういうところにはない。このローカルな世界のなかに存在しているし、確かに自然の無事がなければ人間たちの無事もないと感じるのである。

歴史的にみれば自然と人間を共生させてきたものは、このような精神である。この精神につき動かされて、村人たちは森を守り、川を守ってきた。そしてこの気持ち、山神を祀らせ、水神を祀らせてきた。その奥には、自然への信仰があつた。

日本の自然信仰は、自然に純粋な世界、穢れなき世界をみる精神を土台にしている。絶対的に純粋なものであるのだから、それは神であつた。逆

せてしまうことは、全体としては明らかに不合理であるが、それを推進する企業としては再開発ビルの建設が、土地の高層利用や利益の追求、業務の効率化などの視点から合理的な判断だったりする。

合理性とは、ある角度からとらえた合理性以上のものではない。だからとらえる角度が違えば合理性は一致せず、それぞれの合理性と全体としての合理性とが、矛盾をきたしてしまう。その結果誰もが自然と人間の共生をめざしているのに、それぞれの個人や企業の行動は、自然と人間の共生を破壊するという現実が生まれる。

そしてそれが今日の現実であるとするなら私たちはどうすればよいのか。

私の暮らしは、東京と群馬県の山村、上野村を往復するなかに成立している。三十五年ほど前にこの村に釣りに行き、なんとなく気に入って、半分この村で暮らすようになった。畑と森と川、結び合う村人のいる暮らし。それが上野村での私の暮らしである。

この二、三十年は別にして、かつては村の人たちは、自然と人間の共生などという言葉を意識することはなかった。自然に囲まれて暮らし、ときにその自然を利用し、また自然が損傷を受けたときには自然を修復して暮らしてきただけである。

村人は、自然の無事という言葉をよく使う。自然が無事であつてほしい、という思いである。森は無事であつてほしい。だから森の無事を祈って森に山神を祀り、川の無事を祈って水神を祀る。この自然の無事は、村の無事、自分の暮らしの無事と強く結びついている。ゆえに自己主張をし、自己の欲望を実現しようとする人間を、悟りを開けない穢れた存在とみることによって、それは成立していたのである。自然の無事と結びながら暮らすことは、自然に導かれながら穢れをとり、悟りを開いていく人間の未来を保証することもあった。

ここにも合理的に説明できないものがある。だがそれこそが自然と人間の共生を支えてきたのだということを、私たちはいまどうとらえるべきなのか。

近代の歴史はこのような発想を、古く非合理的なものとして葬り去ろうとした。それに代わって、すべてのことを合理的に解釈しようとした。だが皮肉なことに、今日では、この変化が環境問題を解決させようとするときに壁になってしまったのである。私たちは合理的に解決しようとするほど、全体としての合理性とそれぞれの合理性が一致しないという矛盾に直面するようになった。

地球環境問題からみれば、途上国の経済発展は好ましくない。しかしそんなことを言えば、それは途上国にとつては非合理的なこと以外の何ものでもない。だから合理的に解決していこうとすると、最後はどこで国際協調がとれるかということになり、とどのつまりは経済力や軍事力を背景にした政治力で政策が決まるという、非合理的な決定を下す他ないものである。

環境維持のために経済活動に対する何らかの規制を加えようとするときも同じである。ここでも合理的な判断が一致しない以上、最後は力を背景にして「こんなものでどうだろう」という非合理的な決定をするしかない。こうして合理主義は自己矛盾に陥っていく。

自然の無事を守ろうとした村人の精神は、このようなものとは違っていた。人々が守つたのはローカルな文化的価値である。それにもとづいて人々は自然の無事を守ってきた。この世界のなかに身をおくことによつて、私もまた合理主義の自己矛盾から抜け出すことができた。